

大学生における学業的不正と学業的延引行動との関係

○龍 祐吉 (東海学園大学)

小川内哲生 (尚絅大学短期大学部)

キーワード：大学生，学業的不正，学業的延引行動

問題と目的

Chapman et al. (2004) は学生時代に学業的不正を行って者ほど職場においても不正を繰り返し甚大な被害を与える可能性がある示唆している。したがって関連要因について明確にし、学業的不正の防止策を講じることが求められている。学業上重要な課題の着手や完成を不必要に遅らせる行動（学業的延引行動）はカンニングや剽窃等学業的不正を導き易いことが示唆されている (Roig & DeTomaso, 1995)。つまり学業的延引行動が原因で知識や理解不足が起りやすく、良い成績を期待できないために不正な手段を用い悪い成績評価を回避する動機が高くなるためである (Patrezek et al., 2014)。さらに学業的不正には自尊感情 (David, 2015)、内発的動機づけ (Davis et al., 2009) 及び学年 (Clariana et al., 2009) 要因が影響を及ぼすことが示唆されている。これらの要因は学業的延引行動との関連性も報告されている。そこで本研究は大学生の学業的不正と学業的延引行動との関係を詳細に検討するために、自尊感情そして授業への内発的動機づけ、学年要因を絡めて検討することを目的とした。

方 法

調査対象者 大学生 295 名 (全て女子) 平均年齢 20.3 歳 (標準偏差 1.06 歳)

手続き 無記名で回答させてその場で回収した。

調査時期 は 20××年 10 月。

調査で用いた測定尺度

内発的興味 Elliot & Church (1997) を翻訳して用いた。因子分析の結果「授業を受けるのが楽しい」等 10 項目 (5 件法)。

自尊感情 Rosenberg (1965) の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。「私は多くの良い資質を持っている」等 10 項目 (5 件法)。

学業的延引行動 Schouwenberg (1995) を翻訳し用いた。因子分析の結果 1 因子を抽出し「わからないことがあると途中で投げ出してしまう」等 12 項目 (5 件法)。

学業的不正 Calabrese & Cochran (1990) を参考に学業不正に該当する項目を作成した。因子分析の結果 1 因子を抽出し「テストの最中に他人の答えをそっと見る」等 11 項目 (5 件法)。

試験準備開始時期の調査 1 項目。1 か月前 (1)

～試験当日 (6) の 6 件法にて回答を求めた。

結果と考察

Figure 1 に示すように、変数間の因果的な関係を探るために AMOS 7 を用いてパス解析を実施した。その結果、自尊感情が低いこと、授業に対する内発的興味が低いことによって学業的延引行動傾向が助長され、さらに試験の準備等が遅延することを通じて学業的不正が起りやすくなることが示された。また授業への内発的興味が高まること、上学年ほどが直接的に学業的不正を抑止することが示唆された。

以上の結果から自尊感情が低いことや授業への内発的興味が低下することは、成績に大きな関心が向かう反面、課題を解決する過程に比較的関心が乏しくなるために、学業課題への着手等の遅延傾向が高まり学習による知識の習得や深い理解の機会を失って、不正行為を助長することが窺える。学年と学業的不正との間に負の関係が認められたことは、Finn & Frone (2001) が指摘しているように、上の学年になるほど、学校内での所属感が高まり、学校との絆が強まることに (学校との同一化) よって学業的不正を抑止することが窺える。今後学業的不正の種類を数多く取り入れる、各々の学業的不正に対する不正の認識度を考慮する等より詳細な検討が求められる。

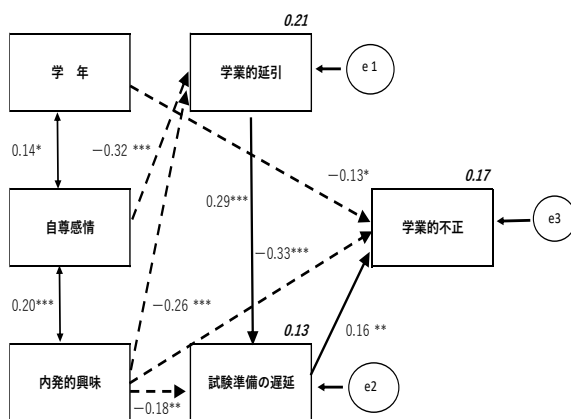


Figure 1 変数間のパスダイアグラム *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

モデル適合性 (NFI=.983, RMSEA=.000) 実線は正の関係、破線は負の関係、イタリックは説明率